

# 『松島金華山漫画之旅』を読み解く

## ～東京漫画会と松島金華山旅行～

瑞巖寺宝物課

非常勤学芸員 尾暮まゆみ

<目次>

はじめに

- 1, 『松島金華山漫画之旅』とは
- 2, 東京漫画会と松島金華山旅行
- 3, 松島金華山旅行と行程
- 4, 大正 11 年当時の鉄道事情
- 5, 数字のはなし

おわりに



はじめに

本稿は 2022 年度企画展「<sup>お</sup>推しの松島・趣味の松島～特別名勝指定 70 年に寄せて～」(会期 2022/12/18-2023/4/23) の関連講座として開催した<『松島金華山漫画之旅』を読み解く> (① 2 月 18 日・② 3 月 18 日) を更に検証し整理したものである。

『松島金華山漫画之旅』が刊行されて 100 年が経過した。初めて目にしたのは、前職の

(社福) 共生福祉会福島美術館の書庫。内容はもちろんだが、登場人物に惹かれ調べ数回展示した。前職を退職後、地元の古書店で同書を偶然見つけ、状態は好いものではなかったが自身の研究資料として購入した。その後、現職の松島瑞巖寺の収蔵図書にて3冊目に出会った。

前職の所蔵品としては、漫画家色紙12枚、「楽描帖(北澤楽天筆)」、近藤浩一路の掛軸、福島禎蔵が醸造販売したフジビール関連資料がある。当初はバラバラの点だった資料達は、東京漫画会の松島金華山旅行関連という線となり、面となった過程がある。

刊行から100年を迎えるにあたり、松島でこれまで不明だったことも新たに分かりこの本を世に紹介する意味を感じるようになる。

## 1. 『松島金華山漫画之旅』とは

### 1-1 概要

『松島金華山漫画之旅』は大正12年(1923)8月に仙台協賛会より刊行された本で、印刷は仙台の東北印刷株式会社が担当した。100年前に東京漫画会という一行を招待した超豪華な観光旅行の様子を綴った一冊である。(資料1)

東京の新聞関係漫画家を主要なメンバーとして結成された「東京漫画会」という団体があった。そのメンバーを大正11(1922)年7月、仙台協賛会が塩竈(注1)、松島、鳴子、石巻、金華山、仙台に招待する企画を立てる。

担当者は上野駅まで出向き、一行を出迎え、仙台までの夜行列車内では今でいう地ビールでもてなした。宮城県庁からは伝馬船孔雀丸も提供され、各地では特別な「おもてなし」で歓迎を受けた。いわば官民あげてのディステーションキャンペーンである。

旅の様子は記事として所属する東京の各新聞に挿絵と共に掲載されたことが、「はしがき」で紹介されている(時期未詳)。また地元の新聞である河北新報にも旅程及び旅の様子が掲載されている。旅の1年後に13編の紀行文(挿絵入り)を一冊の本にまとめたものが『松島金華山漫画之旅』である。

人気漫画家たちがそれぞれ思い思いに自由に紀行文を寄せ、その場면을挿絵として描い

ている。実に愉快的な情緒あふれる文章だが、参加者の名前をニックネームで書いたり、イニシャルで書いたり、読者は頭をひねったことであろう。

一行の船と鉄道の旅は、その後の宮城県への団体観光に大いに貢献したと考える。当観光キャンペーンを企画し、当該図書の編集を行ったのは仙台協賛会。仙台協賛会は現在の観光協会の前身といえる組織である。明治24年(1891)に設立された仙台商業会議所と連携する団体として、仙台経済倶楽部<sup>くろふぶ</sup>が大正2年(1913)3月に結成され、同年秋、仙台地方への観光客の誘致と名所旧跡の保存を計るために組織を拡大し、仙台協賛会と改称した。

この企画は仙台協賛会を中心に、塩竈は同地の商業倶楽部、松島は大宮司雅之輔氏<sup>だいがうじまさきのすけ</sup>、他有志、鳴子・川渡<sup>なるこ かわたび</sup>両温泉地は旅館組合、石巻・金華山<sup>いしのまき きんかさん</sup>は石巻経済協会、仙台は仙台協賛会でそれぞれ担当したことが、河北新報の大正11年7月6日の記事「漫画家／十九日來仙／日程は一週間」で紹介されている。(資料2)

参加した漫画家一行については一覧表で紹介する。(資料3)

注1：表記について、塩竈市役所の表記にしたがう。但し、紀行文紹介では原文ママ。

## 1-2 本の構造と特徴

さて、筆者はこの同誌の三冊を a, b, c, と記号をつける。

- a, 瑞巖寺所蔵本・・・古書店より購入
- b, 尾暮所蔵本①・・・古書店より2020年購入、今後も購入を検討のため①とする。
- c, 福島コレクション本・・・企画側として直接寄贈と思われる(以下、福島本と記す)

三冊とも活版印刷による大正12年発行の初版本であるが、a, b, c, とナンバリングを付けた理由は、後になって三冊の内容に違いがあることに気づいたからだ。cについては、現在、福島美術館旧蔵資料として令和元年より仙台市博物館に寄託している。

(タイトル) 松島金華山漫畫之旅

奥付 本名の記載なし

大正十二年八月十五日印刷

大正十二年八月十八日発行

定価 金壹圓五拾錢

編者 仙臺協賛會

仙臺市東四番丁七十三番地

發行者 山本 晃

仙臺市教樂院丁六番地

印刷者 安齋 進吉

仙臺市教樂院丁六番地

印刷所 東北印刷株式會社

仙臺市教樂院丁六番地

發行所 東北印刷株式會社出版部

振替 仙臺八〇番

電話 八六〇番

二八七番

### 本の構造と様式

	a, 瑞巖寺所蔵本	b, 尾暮所蔵本①	c, 福島本
カバー	ナシ	ナシ	アリ
表紙	常磐紺形の模写	同じ	同じ
帯	ナシ	ナシ	ナシ
見返し	アリ <sup>注2</sup>	アリ	アリ
印刷	活版印刷	同じ	同じ
製本	平綴じ（紙の端から 5 mm程度を綴じ代と して針金留め）	同じ	同じカ
寸法	150×219 mm＝菊判	同じ	同じカ
ページ数	143 ページ	同じ	（未詳）
束巾（厚さ）	8 ミリ	同じ	（未詳）
口絵写真数	7 枚	6 枚	7 枚
はしがき	アリ	同じ	（未詳）
お断り	アリ	ナシ（切り取られた痕）	（未詳）
目次	ナシ	アリ	（未詳）
奥付	アリ	同じ	同じ

注2 「遊び」に所蔵者サイン及び所蔵印あり

福島本については、記憶によるもので、今後確認調査を行いたいと考える。

下記9点を本の特徴としてあげた。

- ① 参加者17名のうち、14名による13編の紀行文
  - ② 各紀行文には、各人の挿画と写真が使用される
  - ③ 旅の行程記載がない（出発月など）
  - ④ 正確な参加人数の記載がない
  - ⑤ 旅の内容は紀行文として所属新聞社に挿画と共に掲載
  - ⑥ 各章の文末に掲載新聞社記載（＝漫画家所属先）
  - ⑦ 目次付のアリ・ナシの2種類がある
  - ⑧ a, b本にページ印刷の誤りがあること 誤 - 210 - / 正 - 120 - （c本は未確認）
  - ⑨ 初版の翌年、大正13年3月10日再版あり
- ①～④については、同年の地元新聞記事で追うことができたが、詳細なルートや参加者名・人数については、各漫画家の紀行文より追うことで、より正確性を得た。

### 1-3 口絵写真

冒頭の1枚目の口絵写真には、毛筆で書かれた一片の詩が掲載されている（図1）。これは、江戸時代の禅宗の僧で南山の雅号で知られる古梁紹岷<sup>（注3）</sup>が松島<sup>おしま</sup>の美しさを高らかに讃えた五言絶句の詩。近代の国語の教科書でも紹介された。また、この詩は隸書体でも書かれ、松島の雄島に詩碑が建てられている。

本書の口絵写真により南山七十歳、文政8年（1825）に書かれた行書体の作品の存在を知ることができた。但し、詩碑の拓影が掛け軸として瑞巖寺で所蔵

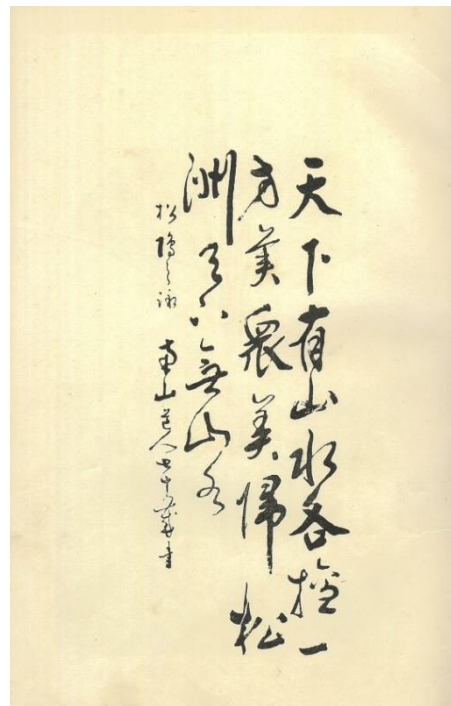


図1 古梁紹岷 五言絶句の詩

されているが、行書体の作品は現在所在を確認できていない。本書の編集あるいは漫画家一行の旅に関わった人物には、大宮司雅之輔<sup>だいぐうじまさのすけ</sup>や福島禎蔵<sup>ふくしまていぞう</sup>といった美術収集家もあり、掛け軸仕立ての形で所蔵していた可能性もある。

2枚目は上方に扇子「尿前の関址」<sup>せんす しとまえ</sup>（北澤楽天筆<sup>らくてん</sup>）。画と松尾芭蕉<sup>ぼしやう</sup>の「のみ風馬のばりす<sup>しらみ</sup>る枕もと」の俳句が添えられる。下方は「金華山頂上所見」<sup>こういちろ</sup>（近藤浩一路筆<sup>こういちろ</sup>）が掲載される（図2）。この2つの作品も美術収集家の手元に渡ったものと考えられるが、現在所在不明である。このページについて、b本には確認できず、切り取られた形跡もなく落丁したものか未詳である。



図2 扇子「尿前の関址」(上)  
「金華山頂上所見」(下)

3枚目は「東京漫画團諸氏の自画像」(図3、次ページ、朱文字は筆者)。16名の自画像と画面上方に画賛が付されている。実は前職で、この画の元となった作品をある古物商から見せていただいた事がある。掛け軸<sup>よう</sup>状態で状態も良好だったが、現在は所在不明である。画に書き込まれたサインからそれぞれの自画像を確認することができた。



東京漫画団諸氏の自画像

図3 東京漫画団諸氏の自画像



4枚目から7枚目は旅行中の記念撮影。4枚目は「松島五大堂前に於ける東京漫画團一行」(図4)。塩竈から豪華な遊覧船に乗船し松島に降り立っての記念撮影。総勢34名で、共に乗船した8名の塩竈芸妓も撮影に加わっている。5枚目は「松島瑞巖寺門前に於ける



図4 「松島五大堂前に於ける東京漫画團一行」

図5 「松島瑞巖寺門前に於ける東京漫画團一行」



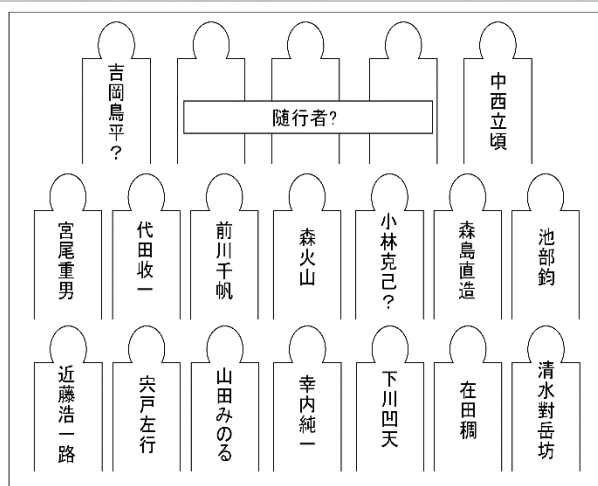


東京漫画團一行」(図5)。23名が瑞巖寺本堂南西端の御成玄関<sup>おなり</sup>を背に記念撮影。6枚目は「石巻<sup>ひよりやま</sup>日和山公園に於ける東京漫画團一行」。石巻の経済協賛会も加わり、太平洋を背景に34名で記念撮影。7枚目は「東北印刷株式会社楼上に於ける東京漫画團一行」(図6)。仙台に戻った一行は最終日に印刷会社を訪問してスタジオでの撮影となる。



行一團畫漫京東るけに上樓社合式株刷印北東

図6 東北印刷株式会社楼上に於ける  
東京漫画團一行



スタジオ撮影の写真であったため印刷が比較的鮮明であり、人物の特定が可能となった。3列目中央の3名は旅の随行者と考える。北澤楽天は途中で帰京しており一行16名+3名で記念撮影。記念撮影を掲載した口絵4ページは縁取りなど、それぞれの装丁に工夫がさ

れている。

注3 古梁紹岷（1756～1839）は江戸時代の臨済宗の僧。現在の神奈川県出身。幼い頃、江戸で仙台藩七代藩主・伊達重村に見いだされ、後に仙台の瑞鳳寺住職となる。詩書画に秀で、瑞鳳寺は仙台領の文化サロンとなり多くの文人墨客が往来した。松島をこよなく愛し、松島を詠んだ詩も数多くある。以下は図1の五言絶句の書き下し。

天下有山水 各擅一方美 衆美歸松洲 天下無山水

松島之詠 南山道人七十歳書

（口語訳：世の中に景色の素晴らしい場所は数え切れないほど有り、それぞれがそれぞれの地で「名勝」と称えられている。しかし、松島は各地の美しい風景が全て集まった景勝地である。まさに「天下第一の絶景」といえよう。 瑞巖寺宝物課 堀野真澄訳）

#### 1-4 はしがきとお断り

「はしがき」には、松島、金華山、鳴子、川渡を我らの名勝であることを称える。そしてこの名勝を紹介するために活動しているがその効果がみえてこないこと、そのため東都一流の漫画家諸兄を招き、官民有志一致して歓迎し、その様子を東都大新聞大雑誌（ママ）の紙上に掲載されると、多くの漫画趣味の人の目に触れた。漫画家諸兄よりその原画と原稿を申し受けて出版の準備を行い、1年の後、上梓したことが記される。

「お断り」は編者が記したもので、1、紀行文はイロハ順であること、全文記載のこと、原画と原稿は寄贈されなかったこと、2、挿入フィルムは参加者の幸内純一の撮影であること、網版の製作技術が拙かったことのお詫び、3、装幀やカットは画家・鈴木伍平（注4）に依頼したこと、4、表紙は仙台名産「常磐紺形」（注5）の模写したもの、漫画家自画像は仙台青葉主人（注6）の為への揮毫であること、と記されている。

注4：鈴木伍平は、文中でも東北印刷株式会社に所属していたとある。

注5：常磐紺型染のこと。江戸時代後期に生まれ、仙台で発達した型染の技法のこと。

以前は藍のみを使って染めていたため「常盤紺型」といわれた。

注6：仙台での歓迎会会場の旗亭青葉（元鍛冶町）

## 2 東京漫画会と松島金華山旅行

### 2-1 東京漫画会

東京漫画会は、大正4年（1915）主に新聞社に所属する漫画家らによって設立された日本の漫画家による第一号集団である。ここでは「漫画」の定義付けや「漫画史」に触れず先行研究に委ねることとする。構成メンバーは多くが美術学校出身者で新聞社に所属する政治及び報道漫画家といえる。「美術」と「報道」を担う最先端メディアとして新聞紙面に挿絵を提供していた。

結成の経緯は同年6月に岡本一平、北澤楽天、<sup>ひらふくひやくすい</sup>平福百穂、近藤浩一路、池部<sup>きん</sup>鈞など11名（10名とも）によって設立された。そのリーダー的な役割であった漫画家の岡本一平は、「漫画」や「漫画家」がジャンル・職業として確立していない状況に対して「<sup>まんが</sup>漫画の<sup>くら</sup>位と漫画の用途とを確立（ママ）」するために結成された組織だったと回顧している。

漫画会の定期的な活動は「漫画祭」というイベントや「漫画展覧会」の開催、雑誌の発行であった。

漫画祭は結成した年から同8年（1919）まで、毎年東京近郊（調布、鶴見、芝浦、向島、千葉県佐原）で開催された。同9年（1920）以降は大阪、赤倉温泉、宝塚、松江、別府へと足を伸ばす。更に、同10年（1921）には東海道五十三次漫画絵巻を東京中央美術協会編集により発行され、翌11年（1922）の別府旅行では、地元温泉とタイアップして東京の総文館より別府温泉漫画紀行「漫画の別府」が発行されている。先行の発行物が存在したものの地方の企画・編集・発行は『松島金華山漫画之旅』が初の試みだった可能性が強い。

漫画展覧会は同5年（1916）の三越呉服店を一回目とし、白木屋、大阪三越などで同12年（1923）まで8回開催している。そして、同年4月10回目の漫画祭を終え、東京漫画会を解散し、日本漫画会が結成された。また同年9月に発災した関東大震災直後のスケッチを11月に大阪三越百貨店で展覧会を開催し頒布したことは特筆すべき点である。

当初の目的である「漫画家としての確立」が遂行されての解散であったかは不明である。先に東京漫画会の構成員の出自について、主に美術学校出身者であると述べたが、漫画家を説明するためには、名前の後に所属が必ず必要であったという。本書においても同様に〇〇新聞の△△君といった記載がみられ、「美術」や「表現」より「報道的役割」が課せられていたという先行研究を確認した。

## 2-2 松島金華山旅行

＜東京漫画団に三本の手紙が舞い込んできた。一つは朝鮮、一つは日本アルプス、一つは仙台協賛会からの松島（及び金華山）見物の御案内状である。京橋の某亭で漫画議会を開いて満場一致松島行きが決定された＞と下川凹天のページの文頭でこの旅のいきさつが記されている。

本企画に参加したメンバーは目次順に池部 鈞・前川千帆（国民新聞所載）、中西立頃（報知新聞所載）、山田みのる（東京朝日新聞所載）、幸内純一（東京毎日新聞所載）、小林克己（やまと新聞所載）、在田 稠（時事新報）、宮尾重男（東京毎夕新聞所載）下川凹天（中央新聞所載）、代田 收一（都新聞所載）、宍戸左行（東京日日新聞所載）清水對岳坊（萬朝新聞）、森島直造（時事新報所載）、森火山（大東京新聞）。

旅には北澤楽天（時事新報）、近藤浩一路（読売新聞）、吉岡鳥平も参加している。但し、3名の寄稿はない。（資料2）

尚、東京漫画会発足の主要メンバーの一人、岡本一平はヨーロッパ旅行からの帰朝する日程と重なり参加を見送った。その出迎えのために山田みのると宮尾重男が今旅行の出発を19日に延期した。近藤浩一路の参加は当初予定されておらず、外遊から帰国間もない急な参加だったようだ。また、平福百穂は秋田県角館出身で何度も松島は訪れているためか参加していない。同年7月は長野県へ記念歌会に出席していることが百穂の年譜に記されている。在田稠は宮城が故郷であり旧友が集まり一日遅れの帰京となる。宍戸左行は故郷である梁川（福島県）に立ち寄るため、最終日に一足早く仙台を発った。これらは、それぞれの紀行文からの情報である。

他にも体調不良で参加を見合わせた漫画家もいたことが河北新報記事に記されている。

### 3 松島金華山旅行と行程

旅行は、大正 11 年（1922）7 月 18 日（火）上野発の夜行列車から始まり、同月 24 日（月）上野行きの夜行列車で終える。漫画家一行は挿絵だけでなく、その文章でも饒舌<sup>じょうぜつ</sup>に旅を語っている。14 名 13 編の紀行文の一部を紹介しながら、行程を記す。掲載文は極力原文ママで紹介する。但し、旧カナのルビは新字体カナで表記した。河北新報では、今回の漫画家一行の旅行について、同 7 月に 8 回にわたり関連記事を掲載している。新聞記事内容の参加者、旅程など紀行文とは齟齬がみられ、また帰りのスケジュールも急遽変更されたものと推測される。新聞記事の一部を資料として紹介する（資料 3）。

一週間の旅の工程は、一行の移動に合わせ、一つの図にまとめてあるので参照して頂きたい。（図 7）

#### 18 日 1 日目

**上野駅**で出迎え⇒22 時発急行夜行列車⇒車中、フジビールで仙台気分

・仙台協賛會が吾等東京新聞関係漫畫家に對して是非金華山を見せたいという案内があつた。仲間では誰も金華山は初めてなので何れも喜んで参加した。去る十八日午後十時上野發：同勢十六人（但し一日遅れて後から二人参加しての事）四名の幹事は態々<sup>わざわざ</sup>・・・車中先ず仙臺産ビールを抜いて此<sup>この</sup>ビールがスモスモ仙臺気分だから・・・

「汽車中で先ず仙臺気分」代田収一（p85）

・仙台協賛會の肝煎りで松島や、金華山に遊びに来ないかと云つて来たので、仲間の有志を狩集めて同勢十四人十八日の夜行で上野を發つ。翌朝原の町無線電信局の素晴らしく高い柱に驚いて眼をさますとやがて仙臺だ。乗り換えて鹽釜に着くと威勢よく煙花<sup>はなび</sup>があがる

「松島から金華山へ」池部鈞・前川千帆（p1）



19日 2日目

7時仙台着：仙台ホテルで休憩⇒9時発⇒9時23分塩竈：花火で出迎え・塩竈様・鹽竈神社  
⇒10時30分宮城県大伝馬船孔雀丸⇒(馬放島、材木島、兎島、桂島)、桂島：桂島ホ  
テルで休憩⇒松島海岸松島ホテル休憩・五大堂・観瀾亭・パークホテル・松島ホテル(泊)

・文明はしみじみ有難い。昨夜上野驛で新歸朝の浩一路子が誰彼の見境もなく矢鱈に握手  
を強請するのを見てトロトロとしたと思ふと、モウ鹽釜驛の改札口から吐出されている。

まづ、序曲としてお釜神社へ参する。 「鹽釜の巻」幸内純一 (p33)

・～高い石段が濃緑の古木にはさまれてそびえて見へる。これが有名な安産の神鹽竈神社  
(ママ示偏)であつた。その高い石段をコツコツ登つて先づ参拝、社務所でお茶を馳走に  
なつて一方を眺めると、松島の一部千賀の浦が盆景の様に見える・・

「安産の神鹽竈神社」中西立頃 (p12)



中西立頃「千賀ノ浦」(p12 全掲)

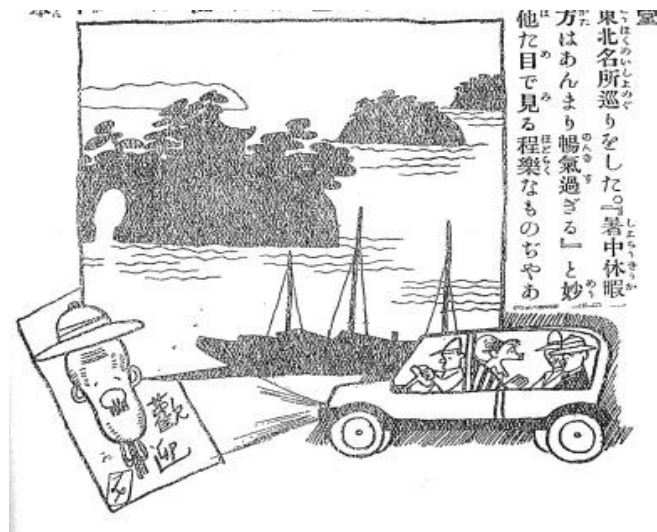
・宮城県の舟孔雀丸に乗つけられて松島へ。馬放島、材木島、兎島、桂島を風と浪とに送  
られて縫つて廻る。舟の中では美人連が陽氣に景氣をつけて一般遊覧客の舟を驚かす。松  
島四大観の一、扇溪に上つて所謂扇溪の幽観おうぎだに ゆうかんに関心。思つたより穢い水と藻草の中を分け

て松島海岸上陸。

「風と浪とに送られて」前川千帆 (p2)

・自分と宮尾とは岡本一平君が十九日に世界一周から歸朝するので、連中よりは一日遅れて出発する。陸前松島に着いた時は夜の十時頃であつた。松島ホテルから仙臺市議会議員の菊田氏と仙臺畫家の伍平君が、自動車で出迎えに来て居た。・・・松島の夜の潮風は寒い位だ、汽車の中で蒸された汗は直ぐ消えてしまふ。

「波靜な闇の中に五大堂」山田みのる (p22)



山田みのる「歓迎」(p22)

20日 3日目

早朝ホテル主人瑞巖寺案内⇒五大堂から新富山経由の電車・松島電車⇒松島駅から汽車：

新庄行き⇒川渡下車⇒自動車移動⇒川渡温泉藤島旅館で休憩⇒自動車⇒川渡駅⇒鳴子駅⇒鳴子温泉：末澤山洞川院道祖神：横屋、金忠、三階、高繁、菅原、鳴子ホテルに分宿

・翌朝宿の主人の案内で政宗公の廟所<正：菩提寺>瑞巖寺を訪ふ。門を入ると右手に高僧の行を励んだ岩窟が澤山ある。右手には法身窟といふのがあつて、大きい石に観音菩薩が刻んである。本堂前の庭には臥龍梅の古木が左右に植つて花時には白と紅と咲いて香氣も殊に優れてゐるさうだ。

「政宗公の廟所瑞巖寺」中西立頃(p14)

・松島にでかけた人は否が應でも瑞巖寺を見ねばならない、山門を入いつて老杉並ぶ参道は如何にも晴々しい。・・・伊達政宗はこんな歌を詠んで居る。松島の松のよはひも此の寺

の 末さかへなん年は経るとも

「瑞巖寺」森島直造（p127）

※挿画は中西立頃とよく似る

中川立頃「岩窟・政宗公の像(p14)



・・・・名湯だそうで鹽類泉である。温泉に入つて晝寝<sup>ひるね</sup>をして晝飯<sup>ひるめし</sup>を食つて鳴子へ行く。七月廿日は土用の入りと丑の日が重なる。この日の湯は効験あらたかだと云つて近在のお百姓連がギツシリ満員、温泉町はお祭りのように賑わつていた。一行六分して六軒の旅館に分宿。 「温泉町はお祭りの様」前川千帆(p3)

・驛迄十四丁の道は凡てレンズに収むべき好画面の連続だつたが風より早く飛ばしてしまつたのは惜い。鳴子へ着いて末澤山洞川院を訪ねて一行は横屋、鳴子ホテル、菅原、高繁、金忠、三階等の六軒に分宿する。私の宿では大氷柱の待遇で酷く仲間の嫉み<sup>そね</sup>を買つたが、実はそれだけ暑いので同宿のH氏はこの氷柱を女房と間違へて抱付いたくらゐだ。

「鳴子の巻」幸内純一（p35）

21日 4日目

**鳴子**：<sup>かたぬま</sup> 潟沼⇒11時発陸羽東線 **小牛田** 駅 昼食（鰻めし）・乗換（北澤楽天は帰京、吉岡鳥平が参加）⇒石巻線⇒**石巻**：多福院・日如山迎陽閣⇒北上川で巻石、稲井石採取場⇒旗亭掬水亭（経済協会主催の宴）一夜はハットセ踊りと遠島甚句、五千の灯籠とポンポン花火、川開きが2回 **千葉甚と福島屋（分宿）**

・ ・ ・一寸賑やかな、しかも廢頹的な古驛と云ふた風の處もある。 ・ ・ 朝起きて散歩したら、道端に筧があつて、山百合が咲いて居た。

「山百合の咲く鳴子温泉」 在田稠 (p 54)

在田稠「鳴子にて」(p54)



・ 此處で最も感じたのは薄暮北上川を遡航して名産稻井石を切出すあたりのその川筋の美しさは懐かしく喩やうもない。東海道坂の下に筆捨嶺と云ふのがあるが、水郷北上川は奥州の筆捨の川だ。 「石の巻」 幸内純一 (p36)

・ いよいよ歓迎會場に着いた。馬鹿々々しい程のお祭り騒ぎである、先ず、赤白の幕をめぐるした舞臺が涼しい川の中に突出してある、幕が開くと藝妓が當地の名物踊りを踊つて見せる、北上川の方から不夜城の様な萬に近い燈籠が流れてくる、空には花火がボンボン擧がる、其れを見様と町の人が橋の上を押すなおすなで警官が四五名も現はれる。

「いくよ仙臺石の巻いくよネ」 下川凹天 (p79)

・ 感じのいゝ港を廣い北上川で挟んだ所で、中央に中島があつて長い二つの橋がある。昔の版畫の様な懐かしみのある處だ。 ・ ・ ・ 日和山迎陽閣に休む。石巻の全體が繪の様に遠い山には西に没つた太陽が輝いて粧ひをかへて、美しく水に映る。

「昔の版畫の様な懐しい石巻」 中西立頃 (p16)

中西立頃「石巻の夜」(p16)



22日 5日目

石巻⇒27トン発動機船金龍丸⇒途中：鮎川小淵ヶ浜にて鯨の解体見学 抹香クジラ 70尺、

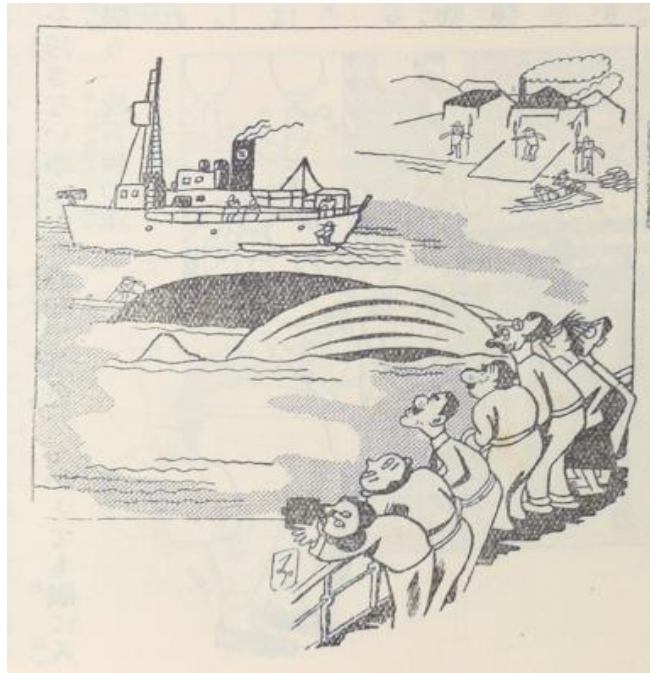
せみくじら 46尺。純利益 1500円⇒16時金華山：山頂まで十八町黄金山神社（泊）

・<sup>ただち</sup>直に船は進路を轉じて<sup>こぶち</sup>小淵に入る。居た居た居たぞ。白い腹を浮べた異様な怪物二頭、何とも見當つかぬ格好だ。傍にはさも得意顔に錨を下した藤村捕鯨會社の丸三丸が泰然自若と控へて居る。先ず四十六尺の本鯨から<sup>りょう</sup>料られる。・・・<sup>きんきん</sup>僅々三十分間に蟻の如くうごめく人間の手で残骸も<sup>とど</sup>止めず運び去られた。 「夢にあこがれる金華山」池部鈞 (p6)

・目の前には一艘の捕鯨船が<sup>こやま</sup>小山の様な二つの大獲物を<sup>しめ</sup>占て<sup>ていはく</sup>碇泊して居た。白い腹に縞目を見せて居るのが本鯨で四十六尺、黒い背を出してるのがマッコウ鯨で七十尺もあるとの事、マッコウ鯨は最も油が豊富で、捕鯨會社のドル箱となる<sup>そう</sup>相である。・・・豆腐の如くスラスラ<sup>きつ</sup>切っていく。見るみるうちに<sup>すいか</sup>西瓜の化け物の様な切身が出来て・・・

「オイ、起きろ、鯨だ鯨だ」山田みのる (p26)





山田みのる「鯨だ」(p26)

・時間が遅いからといふので、黄金神社から最大急行で、登山にかゝつた。・・頂上にはちひさな交番ぐらゐの神社がある、左を大観すると太平洋が一眼に観え、右を大観すると日本畫の墨繪其儘の山々が連山になつて其山の上に向ふの方の海が観える、

「島であつて山であつて公園の様な金華山」下川凹天 (p80)

・古来有名な難所と聞く山鳥の渡しに掛ると凭んな風でも鷹揚に而も陰験な動揺を興えて海の威巖を示した。金華山上陸。鹿が居る、鳥居がある、千載の老樹は鬱蒼として如何にも神仙界だ。

「金華山(上)」幸内純一 (p37)

23日 6日目

朝 お祓い⇒金龍丸⇒外松島⇒正午塩竈着昼食⇒東北本線⇒仙台：仙台ホテルで休憩⇒自動車移動⇒墓参り（政岡・支倉六右衛門・林子平）・会社訪問（山田製菓、フジビール）  
青葉神社・八幡神社・龍寶寺・養賢堂・對橋楼（ハットセ踊り・さんさ時雨）、旗亭青葉（宴）、針久別館と仙臺ホテル（分宿）

・海上鹽釜へ直通航路は六時間ばかり、あまり気持ちがいゝので轉寝するものが多い、さめた時は外松島が見える、眞に松島の雄觀を語るには、ぜひ外海から入らねばならぬとい

ふことが實證された。

「外松島、鹽釜、仙臺」宍戸左行 (p112)

・翌朝五時に一行一同御祈(示偏)禱をしてもらふ、社(示偏)司からお守りだのお札など頂戴する、臺所からお給仕まで男がやる、女つけの無いのも一寸いい。金華山に別れを告げて船は再び鹽釜へと入る、其處から汽車で仙臺市に歸り、仙臺ホテルと針久分店へと分宿、・・・

「金華山の帰り汽船へ」下川凹天 (p81)

・自動車は躑躅ヶ岡公園を一周して政岡の墓、即ち三澤初子之墓を見て山田製菓會社で名産松島豆製造等の模様を見聞する、それからフジビール會社へ馳せつけて麦酒醸造の機械仕掛けに驚嘆の眼を注ぐ、冷たい出来立ての生ビールは何よりの御馳走であつた、こゝを辭て支倉常長の墓を賽す、三百年前政宗の使として盧馬に航した海國男子だ、

「何よりの御馳走」清水對岳坊 (p122)

・これから對橋楼で仙臺名物さんさ時雨や、ハツトセの踊りを見る。之で一行の顔が不機嫌に染んで來た汗が分けもなく飛散してしまつた。さんさ時雨の踊りは伊達家が凱旋の時殿様祝宴の席でやつたもので、御殿女中の風をして踊る、なかなか格式の高いものである。對橋楼は昔よりの家柄で、今でも他の花柳場では宥されぬ。只此處の女中さん達だけの獨技となつて居る。

「格式の高いさんさしぐれ」山田みのる (p30)



山田みのる「さんさしぐれ」(p29)

・其から東北印刷會社を參觀して記念写真を撮る(注7)。此處の専務さんは接待委員の山本君だ。其から對橋楼(注8)に上がつて仙台名物ハットセ踊サンサ時雨(注9)の本家振りを拝ましてもらふ。正宗公凱旋の祝に踊つたんだそうだが、一寸肉感的だ。其間にチリンチリン電話が掛る『早く済ましてくれないと遅くなる』と歓迎會場青葉からの督促だ・・・

「肉感的なハットセ踊」下川凹天 (p83)

注7：7日目の記憶違いカ。

注8：かつて河原町にあった江戸時代から続く茶屋の一つ

注9：さんさ時雨「さんさ時雨か、茅野の雨か、音もせでき来てぬれかかる、ショウガイナァ、めでたいめでたい」

ハットセ「塩竈街道に白菊植えて、何をきくきく、アリヤたよりきく、ハットセ」

## 24日 7日目

仙台市内自動車移動⇒河北新報社(注10)・仙臺日日新聞社・新東北社・東北印刷会社(スタジオにて記念撮影)・宍戸左行は郷里梁川へ)⇒瑞鳳殿：山田みのる蜂騒動

東洋館にて夕食半切や扇子に揮毫⇒22時半発上野行き(山本氏同行)上野

・一行が仙臺で、瑞鳳殿なる伊達家の靈廟へ案内される頃に、自分は、郷里の病母をおとづれ乍ら福島を五里離れた梁川に寄つた。「伊達の梁川やサ思ひ出す」宍戸左行(p114)

・其内瑞鳳殿が最も壯麗で、日光に次ぐといふ、同殿内藩祖(示偏)の像を拝す、一行の爲に特に開扉されたのである。～仙臺出身の在田は昔のお主様の前だ、直に石畳みの上に拝跪して礼拝懇懃を極める、一同大いに感心する、二代廟前に差懸っては一大事件～

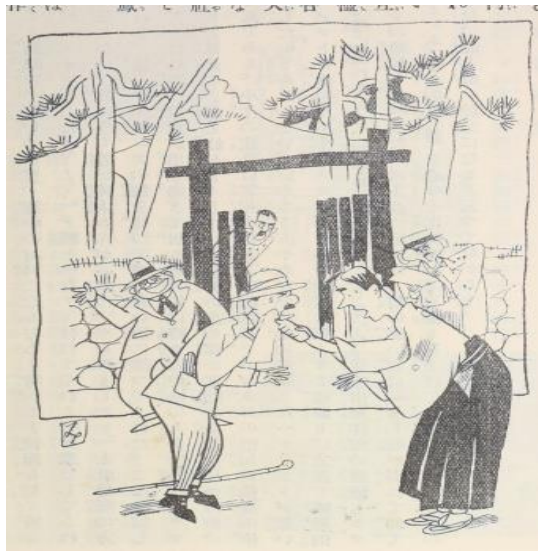
「壯麗日光に次ぐ瑞鳳殿」代田収一 (p 99)

・案内人の門扉を開く音に、門に巢喰つた蜂を怒らせ、其とばっちりが實先生の横ッ面へ飛んで來た。實先生、アット言つて悲鳴を上げた。見る見るうちに横ッ面は、軟式飛行船の如く、ふくれ上がつてしまつた。浩一路先生、自分の唾液を無暗と指につけ、此自然療法に限ると、頬をなでる。

「仙臺の名所めぐり」池部鈞 (p 11)

・瑞鳳殿の諸廟には怖<sup>おそろ</sup>しい蜂が巣を作って居る。祖(示偏)先の霊を守って居るのだらう。此の殿様の御使蜂<sup>おつかいばち</sup>が何人の御勘氣<sup>なんびとごかんき</sup>に觸れたのか。人もあらうに私の頬をウンと云う程螫<sup>ほどき</sup>しやがった・・・いや・・・螫しました。痛い、なかなか痛い。しまったと思ふと同時にこいつあ又、連中の材料になるなあと考へると泣面<sup>なきづら</sup>もして居られない。

「御蜂様の人身御供」 山田みのる (p31)



山田みのる「人身御供」(p31)

・却下の廣瀬川<sup>ひろせがわ</sup>に鮎<sup>あさ</sup>を漁る人や、子供の泳いで居るのが豆のやうに小さく見える、すがすがしい景色だ、旅疲れも忘れて、思ひ思ひに畫帳<sup>がちよう</sup>や扇子<sup>せんす</sup>に筆<sup>ふで</sup>を揮つた。

「青葉に埋もれた市街」 清水對岳坊 (p124)

・・・・お陰<sup>こぶん</sup>で乾分は助かった譚、閑話休題、山続きで森の都一眸といふ景勝に東洋館といふあり午餐の後夕刻迄のたくつて呉れとある、・・・薄暮バウリストの饗宴に列席してプログラムの大團圓となり、十時發上野行夜行列車で仙臺をお暇した。

「壯麗日光に次ぐ瑞鳳殿」 代田収一 (p 100)

・仙臺の市中を眼下に眺む<sup>のぞ</sup>東洋館は、好い場所だ。湯に入って浴衣に着替へ、涼風を迎へゴロゴロ横になって居るのは・・・灯<sup>ともしび</sup>の市中へ入ってバウリストの宴に列し其夜有志の盛んな見送りを受けて我等一行は仙臺に別れををしんだ(ママ)。

「東洋館の涼風」 中西立頃 (p21)



中西立項「東洋館」(p21)

以上が、一行の旅の行程と紀行文の抜粋である。3日目の早朝に瑞巖寺を案内したのは、大宮司雅之輔（1867～1945）である。観光地松島の知名度普及に大いに貢献した人物。事業家として、物産業・旅館業（白鷗楼、観月楼）など運営の傍ら、名士として町議会議員と瑞巖寺檀徒総代を長年務めた。美術品コレクターでもあり、その一部は仙台市博物館大宮司コレクション、瑞巖寺白鷗楼文庫として知られる。

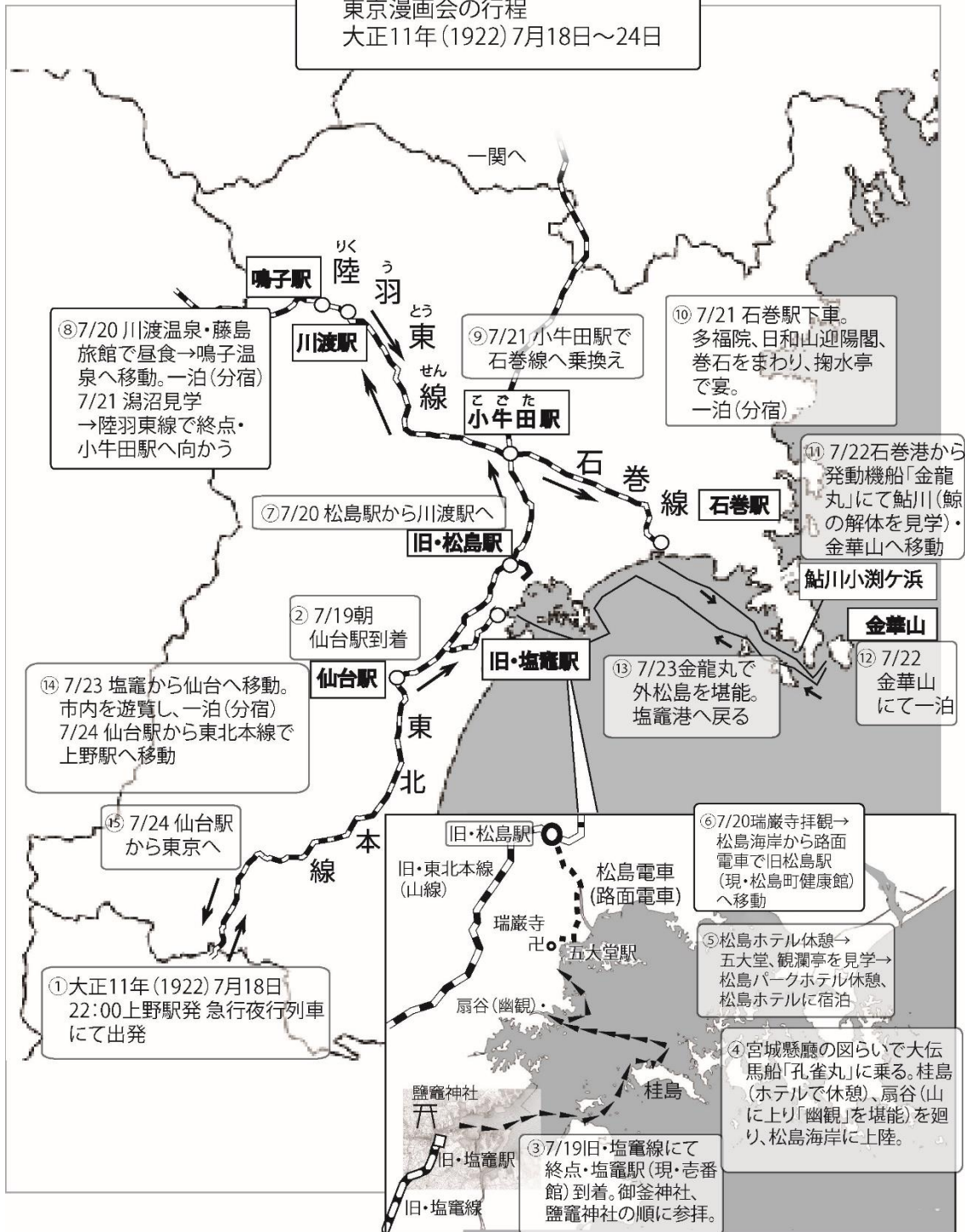
随所に登場するフジビールは富士山の絵をラベルとした仙台の地ビール。製造販売を行っていたのは東洋醸造株式会社（大正 10～12 年、後のキリンビール仙台工場）。仙台の素封家・福島家三代目の福島禎蔵（1890～1979）である。篤志家として障害者施設を運営する共生福祉会創始者で福島美術館の設立構想に関わった。

注 10：河北新報社は明治 30 年（1897）の創刊（～現在）。仙臺日日新聞社は明治 40 年（1906）創刊、昭和 15 年（1940）廃刊。新東北社は大正 10 年（1921）創刊後、数年後廃刊。



図 7

『松島金華山漫画之旅』から見える  
東京漫画会の行程  
大正11年(1922)7月18日~24日



#### 4、大正 11 年当時の鉄道事情

今回の旅の始まりと終わりは上野である。豪華なキャンペーンの旅は鉄道・船・自動車の交通手段が団体の長距離移動を可能にさせた。特に鉄道開通が大きかった。

明治 5 年（1872）の新橋～横浜間の開通に続き、明治 20 年（1887）12 月 15 日 郡山～仙台～塩竈間が開通している。そして、ついに同 24 年（1891）上野～青森間の全線が開通した。すると松島への交通は海路から陸路へと次第に代わっていった。（仙石線、仙山線はまだ存在していない。（注 11）

ここでは、漫画会メンバーが移動に利用した東北線、松島電車、陸羽東線、石巻線の大正 11 年当時の鉄道事情を紹介したい。

東北本線は岩切駅～利府駅～旧・松島駅（現在の松島健康館）～幡谷信号場（品井沼）～旧・鹿島台駅～小牛田駅（後に「山線」と呼ばれた）である。

松島丘陵では急勾配を登るため、強力な蒸気機関車が導入された。岩切駅からは海運による資材を搬入するための軌道があった。当初は野蒜築港まで伸延の予定であったが、港が台風で壊滅的な被害を受けたので、塩竈港までの軌道となった（塩竈線と呼ぶ）。岩切～塩竈間は枝線で後の塩竈線（現在廃止）となる。塩竈駅は塩竈線時代の塩竈港駅、現在の仙石線本塩釜駅に近い。

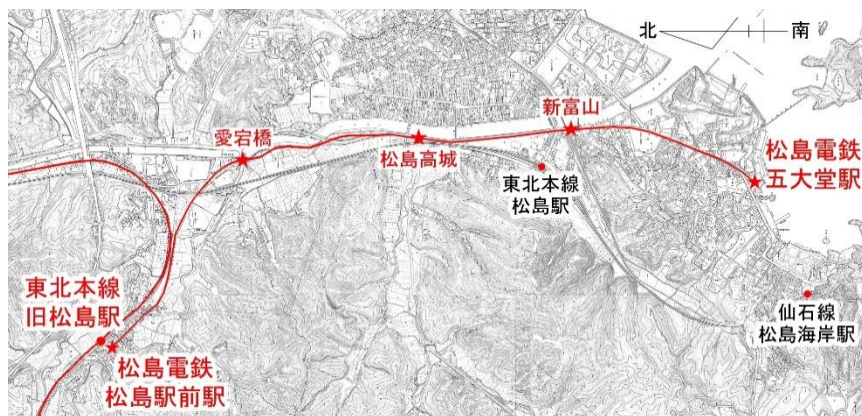


図 8 松島電車の路線推定図

（大正元年測図同 14 年昭和 4 年修正図参考）

松島電車は電力会社・大崎水電（当初計画していたのは遠田電気だが、直前に大崎水電に吸収された）による開業である。始発は東北本線の山線（現在は利府駅を残して廃線）

にあった旧・松島駅（現在の松島<sup>けんこうかん</sup>健康館）を始発とし、「愛宕橋」「松島<sup>たかぎ</sup>高城」「新<sup>とみやま</sup>富山」「五大堂前」までの短い路線であった（図8）。軌道は大正11年（1922）1月に完成し、同年2月4日から電車の営業が始まった。電気を動力とする鉄道は、宮城県内ではこれが最初である。しかし業績不振により昭和13年（1938）休止、昭和19年（1944）に廃線となる。

陸羽東線は小牛田駅と新庄駅（山形県）を繋ぐ。大正6年（1917）11月1日に全線開通。川渡温泉駅、鳴子駅も当時と同じ場所にある。

小牛田～岩出山間は大正2年（1913）、岩出山～川渡間は大正3年（1914）、川渡～鳴子間は大正4年（1915）、鳴子～羽前向町間は大正6年（1917）に順次開通している。

石巻線は大正元年（1912）に仙北軽便鉄道として開通した。うち小牛田駅～石巻駅間は、大正8年（1919）国有化され、軌道も通常列車が走れる幅に改修され石巻線となった。

注11 仙石線：仙台～西塩釜間（大正14）、西塩釜～本塩釜間（大正15）、本塩釜～松島間（昭和2）、松島～石巻間（昭和3）。仙山線：仙台～愛子間（昭和4）、愛子～作並間（昭和6）、作並～羽前千歳間（昭和12）、

#### 4. 数字のはなし

漫画家一行に関係する様々な数字を本図書からトピックとして紹介したい。

この漫画家一行の旅は、大正11年7月18日に東京漫画会14名と、添乗4名の旅で始まった。往路は上野まで出迎え一行は夜10時に夜行列車で出発して、翌朝6時6分に仙台駅に到着した。

7日間の長旅の最中、3名が加わり、2名が先に東京へ帰った。

復路は当初（新聞記載）の出発の予定が変更され、滞在時間が延長し同月24日漫画会一行15名と上野まで同行者1名が仙台駅22時半に出発し、翌朝上野に到着し解散となった。

宮城のおもてなしとして、随所に登場するフジビール。仙台の小田原に土地を購入したのが大正8年、東洋醸造株式会社として製造販売開始がしたのが同10年。キリンビールに

吸収合併され、フジビールが終了したのが同 12 年。3 年余の間の一大イベントだった。

松島電車は東北本線旧松島駅から五大堂駅までの短い軌道で約 3.6 km、駅は 5 駅だった。電車の乗客数と収入は以下の通りである。

大正 10 年の松島駅～五大堂駅	乗客数	28,612 人	収入	6,411 円
大正 11 年	同	乗客数	116,510 人	収入 21,667 円
大正 12 年	同	125,600 人	収入	25,925 円
大正 13 年	同	10,324 人	収入	19,234 円

しかし、業績不振により昭和 13 年 (1938) 休止され昭和 19 年 (1944) に廃線となった。

石巻から金華山へ移動する時、一行は鯨の解体に遭遇する。船を止めて見物する様子が描かれている。抹香クジラは 70 尺 (2100 cm)、せみくじら 46 尺 (1380 cm)。純利益 1500 円であったという。

では、豪華な旅を企画するにあたり、移動費にいくら投入されたのか。埼玉県大宮市にある鉄道博物館に問い合わせた。大正時代終わり頃の 1 円は令和時代の 4,000 円に相当と言われる。大正 11 年当時と現在のお金の価値を比較するのは難しいが、高額であったことは想像できる。

	大正 11 年	令和 5 年
夜行列車上野～仙台間 3 等料金 1 名 <sup>注 12</sup>	4 円 26 銭	乗車券 6,050 円
” ” 2 等料金 1 名 <sup>注 12</sup>	8 円 52 銭	新幹線指定席 11,400 円
” ” 2 等料金 17 名往復	289 円 68 銭	上記 17 名往復 387,600 円
米一俵 (60 kg)	10 円 20 銭	銘柄米平均 15,240 円

注 12 大正 11 年 (1922) 9 月の料金形態について、鉄道博物館 (大宮) 問い合わせ

2 等寝台車 (寝台車利用の場合は、寝台車料金+夜行列車料金)

大型：6 円 50 銭/並上段 3 円/下段 4 円 50 銭

## おわりに

何十年も前にその存在を知った一冊の本。一つひとつの点は線となり、面となっていたものの不明だった参加者名、記念写真画像や出発月日を今回明らかにできた。しかし、今

回、新聞記事の内容との違いや、他の地域で類似する漫画紀行図書の存在があることが新たに分かった。また本来、美術の専門教育を受けた彼らが新聞漫画記者という身分・立場で存在したことは、写真印刷技術が十分でなかったその時代の要望に応えた一つの役割だったようにも思える。挿画、写真、文章を通じて、漫画家一行のしなやかな感性に触れることができる一方、当時の風景やおもてなしなどは、想像するのみである。

100年前の観光普及のために生まれた官民あげての一大事業が詰まった本。また新たな観光の発見や発信に繋がればとよいと願う。

### 【引用・参考文献】

- ・鈴木麻記『大正期における漫画の両義性と社会的布置④漫画家集団「東京漫画会」を事例として』 東京大学マス・コミュニケーション研究No. 88 2016年
- ・河北新報 大正11年7月記事
- ・清水 勲・湯本豪一共著『漫画と小説のはざままで—現代漫画の父・岡本一平』  
文藝春秋 1994年
- ・清水 勲『漫画の歴史』 岩波新書 平成3年
- ・細木原青起『日本漫画史—鳥獣戯画から岡本一平まで』 岩波文庫 2019年
- ・北沢楽天顕彰会編集『北沢楽天—日本で初めての漫画家』 2019年
- ・竹内一郎『北沢楽天と岡本一平—日本漫画二人の祖』 集英社 2020年
- ・東京中央美術協会編『東海道五十三次漫画絵巻肉筆』大正10年
- ・加藤昭作『評伝 平福百穂』 短歌新聞社 2002年
- ・佐々木 果『ストーリー—漫画家としての宍戸左行』 川崎市市民ミュージアム紀要 2013年
- ・高 晟俊『在朝鮮日本人漫画家の活動について—岩本正二を中心に』  
新潟県立近代美術館紀要 2014年
- ・展覧会図録『GIGA・MANGA—江戸戯画から近代漫画へ』 毎日新聞社 2020年
- ・松島町史編纂委員会『松島町諸統計一覧』 平成元年
- ・岩本由輝『東北開発120年』 乃木書房 1994年
- ・小川 功『日本三景・松島の観光振興と旅館経営者—大宮司雅之輔による観光鉄道への関与を中心として—』 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要第9号 2010年
- ・小川 功『松島回遊列車旅行を主催した“観光デザイナー”—和風旅館・洋式ホテル・駅弁・駅構内食堂・列車食堂等の総合経営者・大泉梅次郎を中心に—』  
跡見学園女子大学マネジメント学部紀要第16号 2013年
- ・小川澄夫『松島物語』 あづま書房 昭和63年
- ・仙台市史 通史編7 近代2 仙台市史編さん委員会編 平成21年
- ・仙台市史 特別編3 美術工芸 仙台市史編さん委員会編 平成8年
- ・まちづくりNPO げんき松島研究所『松島の近代建築探訪マップ』
- ・丸文松島汽船株式会社『マップ 松島遊覧コース』
- ・展覧会図録『松島への足跡—白鷗楼文庫を中心に—』 瑞巖寺 平成18年
- ・簡易図録『企画展 推しの松島・趣味の松島』 瑞巖寺宝物館 2022年



## 【資料1】『松島金華山漫画之旅』目次 タイトルと小題

本企画に参加したメンバーは目次順に池部鈞・前川千帆（国民新聞所載）、中西立頃（報知新聞所載）、山田みのる（東京朝日新聞所載）、幸内純一（東京毎日新聞所載）、小林克己（やまと新聞所載）、在田稠（時事新報）、宮尾重男（東京毎夕新聞所載）下川四天（中央新聞所載）、代田收一（都新聞所載）、宍戸左行（東京日々（ママ）新聞所載）、清水對岳坊（萬朝新聞）、森島直造（時事新報所載）、森火山（大東京新聞）、旅には北澤楽天（時事新報）、近藤浩一路（読売新聞）、吉岡鳥平も参加。但し、3人の寄稿なし。

※名前に続く（ ）数字はページ数、

### 松島から金華山へ 池部 鈞・前川千帆 (一) 挿画 10 点、写真 1 点

- 一、豈圖らんや遊廓
  - 二、風と浪とに送られて
  - 三、温泉町はお祭りの様
  - 四、緑色の硫黄の湯を湛へた沼
  - 五、石の巻人の漫画（本文では「画」）趣味
  - 六、夢にあこがる金華山へ（本文では「へ」は付かない）
  - 七、聞きしに勝る（本文では「まさる」）美しい島
  - 八、ビックリした鯛の頭
  - 九、港の入口に駆逐艦三隻
  - 十、仙臺の名所めぐり
- <仙臺名物わしが國さ>

### 鹽釜から金華山 中西立頃 (一二) 挿画 10 点、

- 一、安産の神鹽釜神社（本文では「鹽竈神社」）
  - 二、白い砂、紺碧の海（本文では「、」は付かない）
  - 三、政宗公の廟所瑞巖寺
  - 四、硫黄の香高き温泉町
  - 五、昔の版畫の様な懐しい石巻
  - 六、鯨が島のように浮いてる
  - 七、山始まって以来の歡待
  - 八、仲間の國寶と税金のかゝった藝
  - 九、みの字君（本文では「ミの字君」）の災難
  - 十、東洋館の涼風
- <金華山> 大伴家持、大槻磐溪

### 蜂に螫るゝ記 山田みのる (二二) 挿画 7 点、

- 一、波静かなる闇の中に五大堂
- 二、懐しみと親しみの多い質朴な温泉
- 三、石の巻の燈籠流し
- 四、オイ、起きろ、鯨だ／＼
- 五、他に見られぬ秀靈幽翠の金華山

- 六、権式の高いさんさしぐれ踊
- 七、御使蜂の人身御供

#### 東北漫畫順禮

幸内純一

(三三) 挿画 7 点、写真 14 点

- 一、鹽釜の巻
  - 二、松島の巻
  - 三、鳴子の巻
  - 四、石の巻
  - 五、金華山（上）
  - 六、金華山（下）
  - 七、仙臺の巻
- <仙臺名物さんさしぐれ>

#### 東北の涼味

小林克己

(四一) 挿画 13 点、

- 一、鹽竈神社の老杉と美しい女
- 二、神木多羅葉と文治燈籠
- 三、女と涼風とビールと波と松島
- 四、扇溪の眺望は千萬兩
- 五、瑞巖寺の寒い洞窟
- 六、政宗公朝鮮土産の紅梅白梅
- 七、脚氣の川渡温泉
- 八、河鹿の鳴く鳴子の湯の町
- 九、北上川を持つ石巻は幸福
- 十、水と女の石の巻
- 十一、鯨の鮎川
- 十二、靈境金華山
- 十三、自動車の乗降二十八回

#### 仙松の印象

在田 稗

(五四) 挿画 5 点、

- 一、松島の燈籠流し
- 二、山百合の咲く鳴子温泉
- 三、忘れ得ぬ石巻の印象
- 四、花崗岩と鹿の金華山
- 五、森の都仙臺

#### 松島から仙臺

宮尾重男

(五六) 挿画 14 点、

- 一、美しい松島
- 二、かゞされる仙臺味噌の香
- 三、かつけ川度、かさ鳴子
- 四、郡長さんしか入れない室
- 五、北上川を夕風に吹かれながら
- 六、賑やかな遠島甚句
- 七、大きな鯨が奴豆腐の様に



- 七、石の巻の夜、五千の流燈
- 八、美人の多い鮎川村
- 九、人馴れた鹿共の群
- 十、渺茫たる太平洋は水天一抹
- 十一、金華山社務所の三つの驚異
- 十二、外松島、鹽釜、仙臺
- 十三、昔谷風今伊達模様（本文では「昔谷風、今伊達模様」）
- 十四、伊達の梁川やサ思ひ出す

**漫画の旅** **清水對岳坊** (一一五) 挿画 9 点、

- 一、油の如く風いだ海
- 二、大氷柱を背に電氣扇
- 三、水の都石の巻
- 四、冴えた撥音、美しい肉聲
- 五、憧憬の金華山
- 六、鹿の爲めに一掬の涙
- 七、外松島の男性美
- 八、何よりの御馳走
- 九、仙臺のローカルカラー
- 十、青葉に埋もれた市街

**東北路ところど** **森島直造** (一二五) 挿画 8 点、

- 一、鹽釜神社
- 二、松島
- 三、瑞巖寺
- 四、川渡温泉
- 五、鳴子温泉
- 六、石の巻
- 七、金華山
- 八、仙臺

**夏の東北めぐり** **森 火山** (一三三) 挿画 10 点、

- 一、安産の守護神う
- 二、桂島から松島へ
- 三、鳴子は賑やかな温泉町
- 四、畫趣に富む石の巻
- 五、郷土情調の溢れる面白い俗謡
- 六、生れて始めて見る珍客
- 七、眺めの好い金華山の頂上
- 八、松島の眺めは内海より外海
- 九、仙臺のお彼岸詣り（本文では「於？彼岸詣り」）
- 十、仙臺のお別れ

## 【資料2】東京漫画会の河北新報関連記事 大正11年7月

- 6日 「漫画家 十九日來仙 日程は一週間」  
19日 「漫画團 招待日程／漫画家等出發」  
「漫画家等出發 (東京新聞記事を掲載)」  
20日 「漫画團 一行昨日着仙鹽釜から松島へ」  
集合写真<クレジット: 作日來仙せる漫画團一行／昨日仙臺ホテルの前にて>  
21日 「漫画家團東下り(一)でもる生」 仙臺～松島瑞巖寺  
(16名の似顔絵／挿絵2点)  
23日 広告記事 「東洋醸造株式会社」  
歓迎 漫画大家一行 フジビール 特色を遺憾なく發揮せる一行の自畫像」  
24日 「漫画家團東下り(二)でもる生」 鳴子での分宿(挿絵3点)  
26日 「漫画家團東下り(三)でもる生」 川渡駅～石の巻(挿絵3点)  
27日 「漫画家團東下り(三)でもる生」 石巻～金華山～仙臺 「完」

※文中<>、文中／は筆者加筆

※タイトルの「マーク」は新聞見だしの改行

※文中は新聞内改行せず

※旧かな、文字(漢字)は、記事原文のママ

※「でもる」は河北新報社所属漫画記者・画家である渡辺丙午(1884～1965)の事カ。

大正11年(1922)7月19日(水)

### 「漫画團」招待日程

仙臺協賛會招待に係る東京各新聞雑誌漫画記者一行は出迎へのために上京した山田正一、鈴木伍平兩氏の案内にて十八日午後十時上野を出發し／今十九日午前六時六分仙臺着／協賛會の歓迎を受けて仙臺ホテルに入り／朝食後午前九時發の列車にて鹽釜に向ひ／次の如き行程を以て各名勝を探る豫定であるが／鹽釜町に於ては町役場及商業俱樂部に於て／松島は大宮司雅之助氏／鳴子は旅館組合及町役場／川渡は藤島旅館／石ノ巻は經濟俱樂部及町役場／金華山は社務所においてそれら歓迎する筈で／一行は名勝を探つて／後二十三日仙臺に戻／青葉に於ける協賛會主催聯合歓迎會並に青葉主人招待宴に列し／仙臺ホテル／針久別館に分宿の上／二十四日午前八時二十五分發の列車にて歸京すべく鐵道側においても種々便宜を與へる筈／なほ一行中大阪毎日の水島爾保布氏(※)は胃腸病のため來仙を見合せたと

△第一日(七月十八日)午後十時上野發△第二日(七月十九日)午前六時六分仙臺着、驛前仙臺ホテルに於て朝食、午前九時仙臺發、同九時三十分鹽釜着、鹽釜神社參拝、同十時 半乗船桂島、扇溪、その他巡航(船中餐)／午後二時松島海岸上陸記念撮影(東北印刷寫眞部)／瑞巖寺、五大堂、雄島、松島パークホテル(休憩)、其他巡覽／午後六時晚餐會(松島ホテル)一泊△第三日(七月二十日)午前八時松島海岸發新富山經由電車／同九時一分松島驛發車／同十一時十四分川渡着午餐會(藤島旅館)／午後三時川渡發陸行(自動車)田中、赤湯、車湯等觀察※／午後五時鳴子着／鳴子ホテル、横屋ホテル、菅原旅館、高繁旅館、金忠旅館へ分宿△第四日(七月二十一日)午前瀉沼、間歇噴泉等觀察／午前十一時三十二分鳴子發午後一時十二分小牛田着午餐(驛構内)／同

二時二十分小牛田發同三時三十分石巻着／吉野先帝菩提碑一皇子宮、日和山、長濱等觀察／午後五時石巻經濟協會歡迎會（一泊）／△第五日（七月二十二日）金華山參拜（社務所一泊）△第六日（七月二十三日）朝金華山發／正午鹽釜上陸午餐（驛前旅館）／午後一時五十五分鹽釜發同二時二十七分仙臺着／宮城県商品陳列所、大崎八幡、林子平墓、支倉六右衛門墓、フジビール株式會社、政岡墓、木下藥師堂、瑞鳳殿其他巡覽／午後四時名物さんさしぐれ、ハットセ踊觀覽（對橋楼）／午後六時仙臺協賛會歡迎會（青葉）／驛前仙臺ホテル及針久別館分宿△第七日（七月二十四日）午前八時二十五分仙臺發午後四時三十分上野着（解散）

### 漫画家等出發

仙臺協賛會の招聘に應じた都下新聞漫畫記者一行は十八日午後九時頃迄上野驛前櫻亭に集合上京する／案内役二氏と漫畫家一行は十八日午後十時の急行で上野驛を出發せり／尚／朝日の山田／毎夕の宮尾二氏は一日遅れて出發するといふ／やまとの長崎／朝日の服部／岡本／中外の細木原／時事の小川五氏は社業多忙の爲め残念ながら出發せざる由（東京新聞）

※水島爾保布（におふ、1884～1958）漫画家、小説家、隨筆家、爾保布は本名、東京美術學校（日本画科）、記事では大阪毎日新聞だが、實際に所属していたのは東京日日新聞カ。

大正 11 年（1922）7 月 21 日（金）

漫画家團東下り」(一) でもる生」

僕は今回東下りの漫畫家連と仙臺から同行することになった／半分はお客様で／後半分は接待員いふ珍妙な策である

僕は接待なんて嫌だといふと○さんは／どうせ君は接待なんていふ柄ではないから結局全部お客様といふ事になる訳だといふ／成る程○サンは智慧がある

兎に角／停車場で一行に加はり／汽車の中で名刺の交換をした

盲滅法に十五人も一度に取り換た」のだから何人が誰やら騒張り分からない／何度も人に名を聞くのも氣が利かないから／片ッ端からお顔をスケッチした／そして其れに皆名を書き入れた／これなら頼まれても忘れっこはない

参考の爲／茲に御紹介する／但し中には自畫像の写しも大分ある

- 一、<近藤>浩一路サン
- 二、<在田>稠サン
- 三、<清水>對嶽坊サン
- 四、<池部鈞>均サン
- 五、<幸内>純一サン
- 六、<北澤>樂天サン
- 七、<宍戸>左行サン
- 八、<中西>立頃サン
- 九、<前川>千帆サン
- 十、<代田>収一サン
- 十一、<森>火山サン
- 十二、<下川>凹天サン
- 十三、<宮尾>しげをサン
- 十四、<小林>克己サン
- 十五、<森島>直造サン
- 十六、でもる

そして／僕の分は樂天さんが描いてくれた／僕は自分の顔は忘れないから安心だ／

以下、略



【資料3】大正11年(1922)東京漫画会<松島金華山漫画之旅>参加者一覧

50音順

	名前	所属・年齢	出身	生没年	入会年	出自
	在田 稠	時事新報、35	宮城	1887 ; 1941	①1915～	東京美術学校
	池部 鈞	国民新聞、36	東京	1886 ; 1969	①1915～	東京美術学校
早	北澤楽天	時事新報、46	埼玉	1876 ; 1955	①1915～	フランク・ナンキベルに師事
	幸内純一	東京毎日新聞、36	岡山	1886 ; 1970	②1916～	太平洋画会研究所
	小林克己	やまと新聞、	未詳	未詳	未詳	東京美術学校(在田の1年下)
	近藤浩一路	読売新聞、38	山梨	1884 ; 1962	①1915～	白馬会、東京美術学校
早	穴戸左行	東京日日新聞、34	福島	1888 ; 1969	⑦1921～	シアトル遊学
	清水對岳坊	萬朝新聞、39	長野	1883 ; 1970	②1916～	川端画学校
	下川凹天	中央新聞、30	沖縄	1892 ; 1973	②1916～	北澤楽天門下生
	代田收一	都新聞、42	長野	1880 ; 1958	①1915～	白馬会原町洋画研究所
	中西立頃	報知新聞、25	京都	1887 ; 1926	⑦1921～	白馬会葵橋洋画研究所
	前川千帆	国民新聞、34	京都	1888 ; 1960	④1918～	関西美術院卒業
遅	宮尾重男	東京毎夕新聞、20	東京	1902 ; 1982	⑥1920～	岡本一平門下生
	森 火山	大東京新聞、42	東京	1880 ; 未詳	⑤1919～	独学、時事新報に投稿
	森島直造 (三トモ)	時事新報	未詳	未詳	③1917～	東京美術学校(在田の1年下)
遅	山田みのる	東京朝日新聞、33	茨城	1889 ; 1925	③1917～	東京美術学校(在田の1年下)
遅	吉岡鳥平	掲載未詳、29	宮城	1893 ; 1933	未詳	東京美術学校
欠	水島爾保布	東京日日新聞、38	東京	1884 ; 1958	⑧1922～ カ	東京美術学校
不	岡本一平	東京朝日新聞、36	函館	1886 ; 1948	①1915～	東京美術学校
不	平福百穂	国民新報、45	秋田	1877 ; 1933	①1915～	東京美術学校

※早：早く帰京、遅：遅れて参加、欠：当日急遽欠席、不：不参加、

※東京美術学校：現東京藝術大学～日本画・洋画を専門に学んでいた。

※渡辺丙午(1884～1965)旅行に同行した河北新報社所属の漫画記者、日本画家、